

## 第6回 JLPP 翻訳コンクール スペイン語部門講評

ラテンアメリカ文学研究者、翻訳家、東京大学名誉教授  
野谷文昭

今回スペイン語部門は初めてのコンクールということで、どのくらいの応募があるか見当がつかずいささか不安ではあったが、その不安は杞憂に終わった。というのも予想を上回り、応募者の数が80名を超えたからだ。そのかわり第一次審査に大変時間が掛かることにもなった。応募総数もさることながら、優れた翻訳が多かったため、選考が難航したというのが大きな理由だ。本審査でも同じ理由で評価は分かれた。スペイン語を公用語とする国の数は多く、言語・文化に国や地域による相違もあるが、審査にあたってはその種の相違よりも、訳文が課題テキストの文体に即しているかどうかを重視した。

小説部門の課題は鹿島田真希の短篇「波打ち際まで」で、主人公の女性は「女」、またパートナーらしき男性は「男」としか呼ばれない。これに象徴される抽象性をどう処理するか。第三者による語りの中に一人称の会話が混じるという文章をどのように訳すかといったことが試された。その結果、直接話法を多用した例もあれば、自由間接話法を周到に用いた例もあったが、この短篇では直接話法を多用しすぎると、作品の静謐さや緊張感を損ねる可能性がある。また読者へのサービスが過ぎて説明過多になると作品の雰囲気や壊しかねない。その意味でも難しい課題だったろう。

一方、評論・エッセイ部門の課題の向田邦子「お辞儀」という作品では、主人公の「私」の日常が語られ、留守番電話に入っているメッセージのモノローグが、直接話法で面白おかしく披露される。その中に「私」の友人でタレントの黒柳徹子のメッセージが混じっていて、これも愉快だが、このあたりはユーモアをうまく表現できるかどうかの一つのポイントとなる。というのもこの後に語られる母親の病や海外旅行の話、祖母の通夜のエピソードがしみじみとしたものなので、落差をつけるためにも笑いが必要なのだ。

今回、最優秀賞を射止めたのはアルゼンチン出身のエドワルド・ロペス・エレロ氏で、その訳文は無駄のないこなれたものだった。例えば「多くの女たちにとって、毒薬を買うにはあまりに根気が必要で、刃物を持つには重かった」という箇所の「刃物」を、彼女が料理を得意とすることを念頭に置き、*arma blanca* とはせずに料理用の *cuchillo* と訳し、重いというニュアンスを、*pesado* という形容詞を使わず、それを持つのに必要な「力」の有無という言い方を用いて間接的に表しているところは見事だと思った。ぜひ文芸書の翻訳を手がけてもらいたい。

また優秀賞のモンセラト・サバテ・ビスカラ氏の訳文も、短篇やエッセイの直接話法の使用に見られるように、簡潔だがリズムがあって気持ちよく読めた。短篇の地の文でも直接話法を用いているのは、場合によっては雰囲気を軽くしすぎてしまいかねないのだが、この作品ではこの文体がうまく当てはまったようだ。訳文に活気が感じられ、若い女性作家の作品などを上手く訳せそうな気がする。

もう一人の優秀賞受賞者の佐野由季さんの場合は、出だしの「もう一日が終わってもいい」を Cuando va a acabar el día としているところなど、若干物足りないが、訳文は癖がなく、全体としてしっかりしている。今後に期待が持てる。